

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	辛苦の省察
Author(s)	近藤, 良樹
Citation	HABITUS , 28 : 1 - 16
Issue Date	2024-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/55065
URL	https://doi.org/10.15027/55065
Right	
Relation	



辛苦の省察

近藤良樹

(広島大学名誉教授)

忍耐の対象は、苦痛に代表させることができようが、その苦痛は、痛みとか苦しみとか辛さにと具体化される。痛みは、損傷による生理的な痛覚刺激を本源にするものとしては、捉えやすい。これに対して、苦しみや辛さは、感じている者には自明でも、かならずしも概念的には分かりやすくはない。辛と苦は、社会生活で「辛苦」とまとめて語られることも多い。この世界は、苦界と言われることがあるが、その苦界は、現代の日本では、辛さとか苦しみ、あるいは辛苦といった言葉で言い表されている。辛苦は、内容的には、辛くて苦しいことになるが、では、辛い・苦しいとは何なのか、どう違うのか、あるいは、どうして辛苦にと一まとめにするのか等は、少しアナムネーシス、内省してみないとはっきりしない。この辛・苦をすこし省察してみたいと思う。

1. 辛（つら）さは、行為において生じる

【息し辛いと息苦しい】辛（つら）い、苦しいは、似ているが、異なった使い方がされ、異なった意味をもつ。例えば、呼吸について、「息し辛い」と「息苦しい」は、ちがう。辛いのは、「し」辛いと、「する」行為を意識させる。息する行為について、鼻がつまったりして、これが困難だというのが辛いであり、「息しにくい」に近いものになる。だが、息苦しい方は、主観的感情的に苦痛だと語るものになる。「寝苦しい」と「寝辛い」でも、苦しい方は、主観的感情的に苦痛を語るのであり、辛い方は、寝ようと意思しても長椅子に横になれ

るだけ等といった状態で、その営為の困難さを示す。

この区別は、おそらく、日本での苦痛の区別になるのであって、どこでも同じということではなさそうである。自然科学とちがって、生き方に関わる人間的な概念は、その民族の日々の生活のなかで定着しているもので、日本の辛・苦の区別は、日本人には自明でも、英語やドイツ語では、そういう区別はかならずしも、しない。ちなみに「寝苦しい」「寝辛い」「寝難(にく)い」のちがいを、ウェブの自動翻訳(Google 翻訳等)ではどうなるのだろうかと検索してみた。英訳では、すべて **hard to sleep** と出た。ドイツ語でも同様、**schwer zu schlafen** であった。辛・苦の漢字を使う中国語ですらも三つともに「難以入睡」等と「難」で片づけていた。おおざっぱな翻訳だからと言えなくもないが、翻訳の問題というより、民族の違いによるところが大きいのであろうかと思った。日本語のニュアンスを踏まえた適訳はそれぞれ作ることができるであろうが、日本人がする苦痛における辛・苦などの区別を、異民族の交わりからなる大陸方面では殊更には気にしないのかも知れないと推測した。そこから見える、やり難さ・やり辛さと、内面の苦しみの違いだが、異民族との交わりの中に生きる場合、内的な苦など察し難く、表の辛(**hard,schwer,難**)で十分と無区別にするのかも想像した。しかし、人と人が密に接する日本では、顔色や言葉のニュアンスで内面の苦しきも分かりやすく、外的な活動における困難さへの辛さと、内に生じる欲求などの障害にいただく苦しきは、一つにするわけにはいかないであろう。

辛(つら)いと苦しいは、さらに、「聞きにくい、聞きづらい、聞き苦しい」「見難い、見辛い、見苦しい」では、「難しい」「辛い」がその営為の困難さを語るのに対して、「苦しい」の方は、次元がまったく別のものになる。「聞き苦しい」、「見苦しい」は、自身の見聞きする営為が苦しいというのではない。その見聞きする対象の愚劣さを形容する。「辛さ」は、これと違い、し難(にく)さ

とともに自身の能動的な営為が妨げられて困難な状態にあることを語る。

【食べ辛い・食べにくいという場合】辛（つら）さは、苦痛の中であって苦しさと異なった、行動の困難さの苦痛になるのであろうが、苦痛でない行動にも「つらさ」をもって言うことがある。「美味しいけれども、食べにくい、食べ辛い」という時の「辛い」は、食べ方が簡単でないことを指すだけで、苦痛でなくても言う。ここでは、「食べ苦しい」とは言わない。美味しいものを食べる時、「苦しさ」の形容をもってすることはなかろう（美味の焼き芋などがのどに詰まると苦しいが、これは、気管が圧迫されるのか連動するのかどうか「息苦しさ」で、「食べ苦しい」のではないだろう）。だが、美味しいけれども骨が多いとか、噛むのに固くてという場合は、「食べ辛い」「食べにくい」という。快であっても、その能動的営為のスムーズにいかないことをいうとき、つらい、にくいでいうことになる。なお、「しづらい」と「しにくい」の違いであるが、後者は、単に行為の不如意をいうだけだが、「つらい」の方では、困難さとともに、主観的な不快・苦痛の感じられるものになるであろうか。

行為の困難さを「つらい」「にくい」をもって表現するのであるが、この言葉のみが単独に使われる場合は、意味するものが違ってくる。煩雑な事態は、「にくい」と言っただけでは通じない。「にくい」は、この言葉自体を単独で使うときは、むずかしさを意味することはない。憎悪を意味するのみである。「つらい」といった場合も、煩雑さについてというよりは、耐えがたい苦しさを言い表している感じになろう。おそらく、苦しみよりも一層大きな苦痛になったところで、「辛い」ともらすことになるのではないか。

2. 辛さは、難事への反省的な苦痛

【能動的意思に関わる難事への辛さ】辛（つら）さは、意思をもってする能動的営為に関わった、困難さへの苦痛感情であろう。「仕事は、苦しくはなかった

が、「辛かった」と言うことがある。クレーム受付の仕事では、身体的には苦しさはなかろう。しかし、朝から晩まで、苦情を言われ、罵倒され、ひたすらに謝るようなことになれば、精神的には耐えがたいものになる。「このクレーマー野郎、ええかげんにせえ！」と罵倒し返したいのをじっと抑えつけ沈着な意思の発動を維持して、その難事に耐え続けるのであり、辛い仕事になる。辛さは、この難事での抑鬱、焦燥、煩悶、困惑等の苦痛を指すのであろう。

「仕事は、苦しかったが、少しも辛くはなかった」という場合もある。心身は酷使し疲労して苦しい状態だったが、それは「辛くはなかった」と。ここで想定される辛さは、自身の能動的な意思に沿わない事態になりそうである。そういう意思の抑制が不要だったと。逆に、やり甲斐に満ちていて、意思とその感情は、充実感をもって、辛さなど無縁に嬉々とし楽しさの続くものだったといったことが想像される。

【自意識未熟のこどもには、「つらさ」は言い難い】 苦痛・辛苦が存在していると思われるとき、こどもにおいては、「痛い」とか「苦しい」は、よく言うが、「辛い」は、言い難いように私には感じられる。子供が言ったとすると、大人びた言い方で背伸びしている感じがする。子供が難病になって病床にいるとき、その心身の不如意について、「痛い」とか「苦しい」は、普通に聞くことだが、そこで「つらい」と言ったとすると、特殊なものを想像する。幼い者のうちに、病いの深刻さのゆえに早熟せざるを得なくなった一人前の精神が顔を出しているように思われる。

ひとつの事態について、主観的に直感的に表現する場合と、これに一步距離をとって反省的に客観的理性的に表現する場合がある。価値獲得したときの感情表現として、無邪気に主観的に「うれしい」と言うのと、反省的に自己自身に距離をとって「喜び」をもって言う場合との違いである。苦しさとか痛さは、主観的な直情であるのに対して、辛さは、反省的客観的理性的ということであ

る。辛さは、しっかりした自意識をふまえ、自身の生に埋没せず距離をもって反省的理性的に苦痛を捉えて登場するのではないかと思われる。したがって、こどもが辛いと発言するのは、不自然に感じられ、病気の深刻さが無邪気にとどまることを許さず、病気の自分に反省的な距離をもって、大人びた状態になっているように想像される。

辛さは、行為における困難さという。行為の源の意思がその周囲の状況に立ち向かっていく場面であり、そこに障害等が生じて意思が困難さを見出して辛いと思うのである。そういう状況の困難さへの挑戦的精神は、反省的に自己の能力をふまえ、自然と社会への対決姿勢をもつ自我を確立した者に見出されることで、こどもには、なお、そういう困難さにチャレンジしていくのは、難しいか、あるいは、させたくないということがあろう。自身の営為について反省的距離をもつての能動的な挑戦的精神をもった意志は、なお未熟というのが子供であれば、「辛い」と口にするのは似合わないように思われる。

【二つの辛さ】辛さは、「しづらさ」のはじめは、楽ではないが、せいぜい、しにくい程度で、すこし煩わしいということで、感情的には、不快にまではならないかも知れない。これがしだいに、困難の度を高めていくと、苦痛となってきて苦しさを伴うことになる。その困難さがどんどん高まり苦しさを増していくと、苦しさは耐えがたくなっていく。そこでギブアップすることもある。が、それをなおも耐えて苦しき辛さを続けていくと、最後、ぎりぎりの状態になっていく。そのぎりぎりの点は、苦の限界であるが、そこでは、苦しさに耐え得ず、苦の放棄が念頭に浮かんでくる。そのときに、これをなおも耐え、苦しきを受け入れ続ける場面には、この苦しきから逃げるのを抑止する意志の営為を見出すことになる。そこに言われるのが、再度、「辛さ」になる。この端的な「辛さ」は、苦しきよりもより大きな苦痛に耐え抜く意志の最後の挑戦になっているのではないか(無邪気なこどもに、「つらい」と言わせたくないのは、

主には、この意志の悲壮な辛さについてであろうか)。

3. 苦しさは、思いの抑止にいたく

【痛みは受傷に、苦しみは思いの阻害・抑止に】「産みの苦しみ」という。お産での痛みは大きく、「産みの痛み」といってもよからうに、「苦しみ」という。出産時、はやく生まれてほしいという思いがつのるが、この思い・欲求がなかなか成就せず、延々と苦痛に耐える。陣痛も分娩痛も、大きな感覚的な痛みであろうが、延々と続くのは、はやくという思いが阻止されてのもどかしさ、悶え、焦燥等をもつての苦しみである。分娩での痛みよりも、その思いの抑止されつづける苦しみが出産の主要な苦痛なので（お腹が大きくなってからを含めれば、圧倒的に苦しみの方に軍配があがるであろう）、「産み」の「痛み」でなく、「苦しみ」とするのであろう。苦しみは、当人の思い・欲求が抑止、阻害されているところに抱く苦痛感情になる。

痛みは、痛覚に発する。皮膚などが傷ついて痛覚が刺激され、それを脳に受け取ったものが痛みになる。こころの痛みもいうが、それは、痛覚刺激の痛みの準用にいうことであろう。痛みが、受傷をもって痛覚が動いて感じていくのに対して、苦しみは、その発生の固有の感覚をもっていない。苦しみは、ひとの思い・欲求が働く場で、その生の生動的な思いが抑止され阻害されることに感じる抑鬱・嫌悪・煩悶等になる。辛さは、能動的な営為の阻害・困難さに抱くものになるのに対して、苦しみは、その阻害に感じるとともに、受動的な場面での思いの抑止・阻害にもいたく。能動・受動の欲求・思いについての、思い通りにいかないこと、その阻害・不調に、くるって、思いがくるくる回るだけの状態にいたく煩悶・抑鬱・焦燥等の強い不快感情が、くる（苦）しみになるのであろう。

【苦しみは、生の全成層にわたる苦痛】痛みは、痛覚に発する。したがって、

痛覚のある場所に定位した痛みとなる。右手が痛めば、右手の受傷していることが分かる（勿論、痛みは脳内で感じるのだが、それを痛覚発生の部位あたりに投影して、そこにと定位する。その定位は、おおまかで、心臓の故障なのに、腕の痛みとなったりもする）。痛みは、痛覚に発するものとしては、生理的なものを主要対象にした苦痛になる。これに対して苦しみには、苦覚といったものはなく、その苦しみを発するもの、これを感じとるもの、この私である。個我としての私を感じとる。身体の損傷に痛覚（感覚）が痛みを発するように、この私という人格主体（統覚）が受けとるダメージに、生理的な衝動から精神的な欲求までの思いの通らない阻害状態に、苦しみという感情は生じる（その人格主体が感じる苦しみは、多重人格のもと、別の人格になったところでは、あるいは、耐えがたい苦悩に記憶喪失をもって既存の人格を放棄するような場合、これを感じないことになろう）。苦しみは、痛み感情と同様に、もちろん、感情としての身体反応をもつ。身体を萎縮させ抑鬱状態をつくり、焦燥・煩悶し、強い苦しみの持続は、心身を疲労困憊状態にもしていく。

苦しみは、痛みとちがいで、身体の部位に発するものではなく、この個我の私が発して抱くものとして、その妥当する範囲は、広大である。生理的な欲求が抑止されれば、生理的な苦しみとなる。呼吸が抑止されれば、息苦しいということになる。精神的な思いへの阻害は、精神の苦しみとなる。絶望とか不安は、精神的な自己の苦しみである。

快不快は人を動かしていくが、生理的レベルでは、快が魅了し、不快、その痛みとか苦しみは、これを回避するようにと、人を動かす。痛みも快も生理的には重大な感情である。だが、精神的な世界になると、快は、価値獲得などの思いの実現にともなう些事となり、快（喜びとか楽しさ）はなくても、価値獲得があればよいことになる。それに対して、不快・苦痛の方は、つまり苦しみは、精神世界でも、ひとを突き動かす強力な感情となる。絶望や不安の苦しみ

は、ひとを脅迫的に追い立てて止まない。

【痛みは、回避するが、苦しみには、あえて挑戦もする】痛みは、外的受傷に抱くのが普通で、その損傷を防ぐために、痛みを感じたら即、痛み回避つまり損傷回避へと火急の動きをとる。痛みを受け入れ続けるのは、よほどの例外で、身体を鍛えるためにあえてその痛みに耐えるというようなこともあるが、自然的には、痛みがあると、即これの回避に動く。しばしば、痛みが生じてからではなく、痛みが生じそうな場面で、痛みの想像が、痛みと損傷の回避へと駆り立てる。

だが、苦しみの場合は、即回避へと動くとは限らない。むしろ、これを積極的に受け入れることも少なくない。欲求・思いが抑止されて苦しみをいただくことになろうが、まず、自身の思い・欲求が生起して、直ちに自然的にその思いが実現できるのなら、苦しみなしで済む。呼吸などこれで、呼吸欲は、即実現できるから、息苦しさを感じることはない。即実現できるので、欲求にすらならない。欲求が生じているとは、欲求の不充足が生じているということである。欲求を自覚するところでは、欲求の充足はならず不満で、苦しさを大なり小なり抱く。ひとが創造的に生きる時、新しい欲求・思いを実現しようと動く。とすれば、苦しみをいただくことは不可避で、この苦しみから逃げていたのでは、思いは実現できない。苦しみは、痛みとちがって、これを敢えて受け入れて、この、自身がつくった苦しみに自身が挑戦していくこととなる。困難に出合い苦しみをいただき、この苦しみの営為に挑戦することがひとの一般的な営みになる。損傷の痛みは、異常時の異常事態だが、苦しみは、普通の生にあり、苦の甘受・忍耐など、生の向上にむけて必須のものである。痛みは、予め回避するのが普通である。だが、苦しみは、あえてこれに挑戦するものともなる。

4. この世（苦界）では苦しみが付きまとう

【ひとの営為に広く苦しみはいう】安全を重視しているこの社会では、痛みが出そうならこれを回避できるようにするのが普通で、痛みを感じる機会はあまりない。だが、苦しみは、ひとの欲求等の思いがあれば、多くが思うようにならず、阻害を感じて苦しさをいなくから、しばしば体験する。稀にある痛みにおいても、それが大きいとか長く続けば、思うようにならず苦しみともなる。苦しみは、例外的ではなく、ひとの生に本来的で日常的だといっても良い。

さらに、価値あるものを得ての快は、持続性がないのに対して、苦は、これを獲得するまで、欲求不充足にあって止むことがなく、その苦は持続することにもなる。褒美の快は、瞬時に終わる。快は、引き付けるエサであり、ことが成就したときに短時間これが与えられるだけである。美味の快は、のど越しの瞬時に感じるだけである。口にに入れて快が長く続くのだったら、そのはじめの快にのめり込んで、栄養の摂取は先に進まなくなる。快は、瞬時に終わるのが理に合っている。だが、苦しみの方は、欲求の充足がなるまで、いつまでも続く。価値あるものの獲得が実現するまで、どこまでも、不足の苦しみと、獲得へ向けての努力の苦しみは続く。嫌なものの排除という反欲求の苦しみも、この反欲求が実現するまで持続する。

快不快でこの生は動いていくことが多いが、生理的レベルでは、快も不快も大きな動因となる。快のアメに魅了されて動き、苦にムチ打たれて前にと進む。だが、精神的レベルの快不快では、快の方は、些事となる。価値獲得が目的であり、快はそれに伴うことが時にあるという程度となる。だが、苦痛は、違う。生理的な痛みは勿論だが、精神的レベルでの苦しみも、無視しえないものとして、ひとを突き動かす。精神的に不安にとらえられると、この不安解消のために、必死になる。子供の生まれた喜びなどすぐに消失する。だが、死んだら、親は、自分が死ぬまで悲痛な思いを繰り返す。苦しみは、長く続き、深く広範

困にわたる。

【この世は、苦しみの世界、苦界といわれる】この現世を、仏教では、「苦界」と言う。「痛界」とも「辛界」とも言わない。苦しみの現世として「苦界」と言う。痛みは、そとからのものが多く、痛む前に回避することもある。あまり頻繁に経験することではない。だが、苦しみは、日々にも経験する。苦しみは、自身の欲求や衝動等の意思において生じる。その思いは、まずは、実現されていないから、思いが大きいほど、大きな不充足感をいだく。痛みとちがひ、苦しみは、自身がつもつ欲求実現の過程において不可避のもので、その苦しみを耐え、実現への苦難の過程を貫いて、その思いは実現される。苦しみを回避することなく、これに挑戦して目的達成へと進んでいく。

苦しみは、ひとを抑鬱・嫌悪の状態におき、思いの実現がはかどらず焦燥が続けば、疲労困憊ともなる。痛みと同様に、これを回避して安らかな状態にもっていきたいと思う。痛みは、そとから来る場合、偶然的な事故などであれば、回避不可能なものである。だが、苦しみは、自身の欲求等の思いにはじまることであれば、これをなくすることが可能である。その思いをなくすれば、その苦しみは消滅する。仏教では、ひとの欲求などの意思を小我の我欲と捉えて、苦を根本から絶つためには、その我欲をなくすればよいと主張する。ひとの生は、我欲を根源として成り立っていて、その欲があまりにも貪欲であるがゆえに、満たされることなく、苦しむことになっている。この苦界をつくっているのは、我欲・貪欲であり、その欲望を無くすれば、すがすがしく、無苦の世界が可能になると、仏教は説く。

現代社会は、「欲望の社会」と言われ、欲望肥大となっている。当然、満たされることは限られており、不満の苦しみは必至となる。「苦界」は、人と社会が作り続けているのである。欲求の拡大は、ひとを高めるためにと創造的になる点では、苦ではあっても価値ある世界を実現していくものとして首肯されるで

あろう。大我の大欲は、大いに称賛される。だが、現状は、CMなどが駆り立てていく欲望は、我欲・食欲のそれが圧倒的であり、その苦は、おそらく、無意味な、よけいな苦であろう。それらから離れた、欲望を鎮めた、したがって無苦の世界の方が真っ当な世界というべきである。

5. 辛苦は、辛い難事をふまえ、思いの抑止に苦しむ

【行為の辛さと、思いの苦しきの一体化】「辛苦」は、和語の「つらさ」と「くるしさ」を一つにした漢字熟語である。日常が和語を多用するのに比して、それは、しばしばよそ行きの言葉となる。苦痛の様態を客観的に理性的に捉えようという場合、「いたい」「くるしい」と言わず、日々の使用で汚れていない「苦痛」の漢字熟語を、いうなら学術用語にもなる表現をつかう。それに近いことが、やはり、「辛苦」でも言えるのではなからうか。辛・苦は、日本語では苦辛とはいわないが、中国では言うようで、意味は、労苦とか辛苦になるようだから、辛苦と同等となっているのであろうか。辛苦は、日本語の語感では、労苦と似て、前の漢字にウエイトがあり、辛を中軸にし、仕事とか社会的な活動を想起させ、その活動が困難でし辛く、それが苦しい状態にあるという感じであらうか。

「苦痛」は、受傷への「痛み」と、内的思いの阻害・抑止への「苦しみ」ということでは、ひとにとっての内外の受難の状態を表すのにふさわしい総括的用語になっていると言えるが、「辛苦」もそれに近いものになるうか。つまり、辛さは、外向きの能動的な意思の営為の困難さに出合ったもので、しにくい、し辛いである。他方、辛苦の苦は、内的な欲求等の思いにいだき主観的であって受難の者が感じる苦難、抑鬱・焦燥等の苦痛の感情を、主体の直情自体を示すものといえるであらう。客観的な、能動的意思の営為での辛さであり、主観的な、思いの阻害・抑止された直情としての苦しみである。それは、見えるも

のと見えないものの全体ということにもなろう。辛さは、行為の困難さで、客観的に停滞的状况が見える。その苦しみは、内心のもので、そこから直接には見えない。見える行為の辛さと見えない内心の苦しみの総体としての、日頃の社会的営為での辛苦である。

【辛苦は、困難な能動的営為の展開の全体像】 辛苦は、さらに、ひとの困難な営為展開の全体像を示すものでもあろう。辛苦は、辛さがないと、つまり、外向きの能動的意思の行動への困難さがないと辛苦とは言わないであろう。その苦が、受け身のみ、感受のみに限定されていた場合は、辛苦からは外れるのではないか。例えば、食べすぎで「苦しい」とき、これを辛苦で形容することはできない。辛苦は、主として社会的精神的な能動的営為をふまえたもので、それが困難で、し辛い、しにくいのであり、その持続に苦痛が生じて苦しいものとなる。辛苦でもって、思いと行為の苦界の総合的な展開を語る。

辛苦は、単に辛い苦しいと主観的な直感を語るだけではない。辛いと形容されるものは、意思の本格的な営為への困難さであり、さらに、それを貫徹していくところに生じるのが苦しみであって、その全体を辛苦は語る。辛労辛苦、粒粒辛苦、営々辛苦等に見られるものは、意思を貫き通す姿勢である。単なる激痛は、辛苦では形容しない。大きな苦痛をいうだけではなく、ひとの社会的営為の真摯な展開における苦痛をいうのであり、それをあえて引き受けて貫くことを形容しての辛苦になる。営々辛苦とか艱難辛苦は、困難な営為の、艱難であるものを、へこたれることなく、営々と持続させて、その困難に挑戦し続けることを語る。粒粒辛苦は、粒々、一粒一粒の米を大切に精魂込めて作っていくように、こまごまとした、困難なことを手抜きせず一つ一つ片付けていく辛苦である。

痛みは、受傷で即発生する。突発的でそれ以前はないことが多い。だが、辛と苦は、展開のはじめから終わりまでのプロセスをもつのが普通であろう。辛

苦の仕事は、難（むずか）しいことだとしても「し辛さ」のはじめは苦痛ではない。感情的な辛さはない。仕事がだんだん困難となっはじめて、辛いもの、苦痛となる。苦しみも、ことのはじめは何でもないことが多い。呼吸停止の苦しきは、停止のはじめは呼吸するより楽である。それがだんだんと苦しさを増していく。辛苦は、仕事であれば、はじめは、楽で、本格的になってだんだん難しくなり困難さを加えてきて、やり辛いものになり、苦痛としての辛さにまでなっていく。主観的にはしだいに苦しみの感情も顕著となってくる。その辛苦のそろった展開が日頃の意思する営為、仕事である。営々辛苦、粒々辛苦となり、これを耐え続けて、ことを成就する。辛苦でもって、困難に挑戦するひとの真摯な営為の総体とその核心が語られているといえよう。

6. 苦しきの極限の辛さは、悲しきを含ま

【辛から苦へだが、苦の末の辛さもあるう】意思の営為は、それが思い通りにならないと、不充足の不快をもつことになる。思いの実現が阻害され、困難さに直面する。はじめは、やりにくい、しにくい程度で、「し辛い」ということになる。それをなお、困難に挑戦しつづけて思いの実現に邁進するが、それへの抵抗がさらに大きくなり辛さは増し、疲労も重なれば、次第に苦しくなる。辛・苦である。その苦しき困難さをなおも耐えて進むと、最後、もはや苦の限界となる。その時点で、感情的には耐えうる限度となる。だが、ことが成就してなければ、ひとは、その苦しきを意志でもって強引に耐えさせていく。そのぎりぎりに出てくるのは、苦しき困難な状況の放棄を阻止して挑戦する意志であり、その辛さになる。この最後の辛さは、はじめの「し難い」の「し辛さ」ではない。苦しきのぎりぎりを乗り越えていこうという意志をもつての強引な営為(忍耐)となる。その最後の辛さは、はじめの「し辛さ」とは異なっ、苦の最後のぎりぎりに再登場する、苦の末に出てくる、端的な「辛さ」となる。はじめ

の「し辛さ」は、困難な行動への積極的な意思が担っているが、苦しみの最後に出てくる辛さは、同じく能動的営為であるが、この苦しみに耐えている自己自身を制御する積極的な意志の辛さであろう。苦しきのぎりぎりに、背後に控えている最後の内奥の己が登場して、最終的な戦いを挑もうというのがここでの「つらさ」であろう。

事のはじめは、そのことが「し辛い」、しにくいのである。苦の後に出てくるのは、苦に耐えることが困難で辛いのであり、ひたすらに「辛い」と悲嘆するものとなる。前者は、目的行動への難しさに挑戦する「し辛さ」である。苦しみの最後ぎりぎりに出てくる「辛さ」は、苦しきにあえぐ自身を主として対象にしたもので、その苦の感情を抑止つづける困難な営為であり、苦しきの感情を対象化し突き放してこれを制御しようとする、その意志の困難さになるといえるか。

【苦しきのぎりぎりの辛さには、悲しみがある】 し辛い、やり辛いことを続けていると苦しくなる。苦しきは、このやり辛いことを続ける限り、どんどん大きくなる。苦しきの感情に耐えることが限界にまでなると、苦しきを回避するために、その営為を投げ出して苦しきからの逃走をはかるようなことになっていく。その苦しきからの逃走・忍耐放棄を抑止するのは、その営為を続けている意思であろう。困難さを耐えて意思を貫いている辛さの営為が放棄されなければ、なお、苦しきも放棄されきらないで続く。苦しきの感情はこれの放棄へと衝動を強くするが、この衝動を抑止する意志が最後に控えている。その抑止は、内奥の頑なな意志が、苦しきのぎりぎり・限界に直接関与して、歯を食いしばって己に耐えさせて実現していくものであろう。

その最後の辛さは、「し辛い」のではなく、ひたすらに「辛い」のである。そこには、し辛さとちがって、悲しきの感情をともなう。苦しきの耐えうるその限度を超えていくところでは、間近に敗北を予期もする。苦しきという直情は

もう耐え得ず敗北しつつあり、この直情に反省的距離をもった辛さがかろうじて耐え続けさせているのである。いずれ、敗北することは避けえないと思いつつ、耐える。その敗北寸前の状態で、これに逆らっている辛さは、敗北の涙を先取りする。悲しみを含んだ辛さとなる。

「苦しい青春」と「辛い青春」は、異なる。苦しい場合は、なお、未来がある。阻害するものに挑戦していく楽天的気分がある。だが、辛い青春は、その未来への希望すらも失わせるような、根本の意思を阻害し拒否した過酷な状態にある。もう、その青春は放棄しようというような悲観的な深刻な状態に陥っている。もちろん、辛さは、その青春に耐えて、敗北予期の悲しさに涙ぐみつつも、逃げ出そうとする苦しみを抑止し続けて、辛さに踏みとどまっているのである。この最後の砦となっている己をなす意志を、辛さに耐えて貫徹することができれば、その辛苦を乗り越えた、「死して成れ (Stirb und Werde) !」の新規の自己と世界がしばしば開けてくる。

Reflection on Sin-Ku (hardship-suffering)

Yoshiki KONDO

Japanese people grasp and express their everyday hard active work as Sin-Ku. Sin means hard and Ku means suffering. Sin as Kanji (Chinese character) is translated to “turai (=hard)” in Japanese word. Turai is used usually in the hard difficult activity like as a work in society. Turai is not used in passive matter, used in positive activity and is the feeling of hardships that carry out the difficult work. Ku as Kanji is translated to “kurusii (=pain, suffering)” in Japanese word. Kurusii is used for the suffering of individual person. If his want or impulse is not satisfied, he feels suffering by its inhibition. Though physiological pain occurs from pain sense (sensation), kurusimi (suffering) occurs in the ego (apperception). Sin-Ku as Kanji is compound of Sin (hard) and Ku(suffering). This idiom means the total pain of human activities or positive / negative matters of hardships. This is not used for the only passive matter, but for the active doing like as works. Then, Turai is at first used in the difficulty of compound work. In the beginning, it is only difficult (hard). However, in the continuing it becomes more difficult and is felt as pain or suffering. And lastly it is felt as big suffering and it will be abandoned. In this last stage, person will try to challenge for keeping the suffering by Turai(hardship). This last Turai includes the sorrowness. Because person anticipates the defeat.